

# 日本語の物語文における視覚による状況認知の 表現形式に関する考察

澤 泰人\*

## A Study on Representation of Visual Perceptions of Situations Depicted in Japanese Narrative

Yasuto Sawa

### 0. はじめに

澤(2003)では、英語の物語文中における作中人物が、認知主体として自己を取り巻く外界、すなわち状況を認知し、それを表現者である語り手が言語表現化し、描写するという行為を「状況描写」と呼び、それには「主観的 direct 状況描写」「客観的 indirect 状況描写」および両者の中間的性質をもつ「中間的状況描写」の3つの形式があることを明らかにした。知覚による状況描写の表現には、認知主体と表現者の視点が程度の差こそあれ反映されているという事実に着目し<sup>1)</sup>、そうした認知言語学的枠組から、英語の物語文における「知覚による状況認知」の表現が明快に分類されうることを示したのである。

本稿では、こうした分析手法を、日本語の物語文に見られる、知覚による状況描写の表現に適用する。すなわち、英語の物語文の分析において明らかになった上述の3形式が、日本語でも存在することを確認することを目的とする。これは、両言語の表現傾向上の差異を明確にしようとする対照言語学的研究の前段階の作業であるとも言える。すなわち本稿は、この対照研究の前段階として、日本語の物語文における状況描写の表現形式を分類・整理しておくことを企図するわけである。これを基にして、表現形式に対する視点の反映度という認知言語学的アプローチによる、英語と日本語を基本に置いた言語類型論研究に、今後発展させてゆくことを狙いとしている。

### 1. 視点の反映度の違いによる表現形式の違い

(2003年12月19日 受理)

\* 宇部工業高等専門学校英語教室

ここではまず、英語の物語文の状況描写が、認知主体と表現者がそれぞれ視点<sup>2)</sup>を置く位置、また両者の当該状況からの距離ともいべきもので、3つの形式に分かれる事実を確認しておく。

#### 1.1. 客観的間接状況描写

状況を認知する認知主体が明示され、その視点が当該状況の内側に位置し、表現者がその外側に自らの視点を置いて客観的に状況描写をするもの(下線部が認知主体)。

(1) The old man saw the brown fins coming along the wide trail the fish must make in the water.

(*The Old Man and the Sea*:97)

上例は、The old man が知覚によって認知した状況を描写したものである。ここでは、認知主体である作中人物 The old man が、表現者である語り手によって明示されている。すなわち、The old man が自身の視点を当該状況の内側に置いているのに対して、表現者はさらにその状況の外側に視点を置いて状況描写をしているのである。いわば表現者は当該状況から一定の距離を置き、状況のみならず、状況の認知者をも明示しているのである。この点で、こうした描写の表現形式は、「客観・間接的」と言えよう。<sup>3)</sup>

#### 1.2. 主観的 direct 状況描写

状況を認知する認知主体が明示されず、表現者自身が当該状況に相対的に接近し、認知主体の視点と自らのそれを重ね合わせ、主観的に状況描写をするもの。

(2) Certainly, Dennys thought, anything would be better than this horrible smelling-place full of horrible little people. There was a brief whiff of fresh air. (Wiebe, 1990:15)

上例において、下線部は Dennys の知覚した状況を描写していると理解できるが、認知主体である Dennys 自身は明示されていない。語り手は、自らの視点を相対的に状況に接近させ、認知主体の視点に重ね合わせるように、というよりも認知主体と同一の視点で、当該状況を描写していると考えるのが自然である。すなわち、語り手がいわば Dennys と同一化し、Dennys と同じ視点で当該状況を認知しているので、認知主体 Dennys も、その知覚行為も表現されないわけである。<sup>4)</sup>そこでは表現者であるはずの語り手までもが作中人物の存在する状況の内側に入りこむような形で、認知主体の視点と一体となって状況を「主観・直接的」に描写するのである。

### 1.3. 中間的情况描写

認知主体自身は主観的直接情况描写の場合と同じく明示されないが、その知覚行為は客観的間接情况描写の場合と同じく表現されるもの。

(3) Certainly, Dennys thought, anything would be better than this horrible smelling place full of horrible little people. There was a brief whiff of fresh air. A glimpse of a night sky crushed with stars. (Wiebe, 1990:15)

上例下線部においては、認知主体の Dennys 自身は示されていないが、その知覚行為そのものは A glimpse of という表現で示されている。すなわち、この描写は、表現者が自らの視点を認知主体 Dennys の視点と主観的に同一化させる「主観的直接情况描写」というわけでもなく、逆に自らの視点を状況の外側に置き、認知主体を明示する「客観的間接情况描写」というわけでもない。表現者である語り手の視点は、認知主体のそれとも一致せず、状況の外側に必ずしも存在するとも言えず、その中間の、あいまいな位置にあるのである。「主観的直接情况描写」と「客観的間接情况描写」両者の中間的性質を持つものである。

## 2. 日本語の物語文における情况描写

本節では、日本語の物語文における作中人物つまり認知主体の、知覚による情况描写を考察する。前節で確認したように、英語の物語文における情况描写には3つの表現形式が存在するが、日本語でもそれと同じ分類が基本的に可能である。以下、実際の作品の分析によってそ

れを実証する。扱う作品は、川端泰成著『雪国』である。

### 2.1. 客観的間接情况描写

まず、表現者と認知主体の視点が別個に投影される客観的間接情况描写の例から見ていく。

(4) 島村は駒子の立った後の藤椅子に坐っていると、スキイ場のはずれの坂道に、きみ子の手を引いて帰る駒子が見えた。

(5) 鈴の鳴りしきるあたりの遠くに鈴の音ほど小刻みに歩いて来る駒子の小さい足が、ふと島村に見えた。

(4) (5) それぞれが、島村を認知主体とする客観的間接情况描写であると言える。作中人物である島村が、認知主体として自己を取り巻く状況を認知し、それを語り手である表現者が描写しているのである。作中人物の島村が自身の視点を当該状況の内側に置いていることは言うまでもないが、表現者は完全に状況の外側に自身の視点を置き、「客観・間接的」に情况描写をしている。英語同様、日本語においても、客観的間接情况描写と分類し得る表現形式がここで確認できる。

ところが、日本語においては、形式上は同じ客観的間接情况描写であっても、主観性の程度が異なる場合がある。上例(4)(5)と以下の(6)~(9)の例を比べてみると、その事実が明らかになる。

(6) もうそんな寒さかと島村は外を眺めると、鉄道の官舎らしいバラックが山裾に寒々と散らばっているだけで、雪の色はそこまで行かぬうちに闇に吞まれていた。

(7) もう三時間も前のこと、島村は退屈まぎれに左手の人差し指をいろいろに動かして眺めては、結局この指だけが、これから会いに行く女をなまなましく覚えている...

(8) ...島村が眺め直していると、女は火燧板の上で指を折りはじめた。

(9) ...島村が自分の寝床を見廻しながら、枕もとの時計を拾うと、まだ六時半だった。

これらの例((6)(7)では下線部)もまた、島村を認知主体とする知覚による情况描写であり、形式面から見て、客観的間接情况描写であることは間違いない。しかし、島村の知覚行為を表す表現を、(4)(5)では「見える」としているのに対して、(6)~(9)では「眺め

る」「眺め直す」「見廻す」としている。この点は、非常に重要である。同じ視覚を表す場合でも、一般的に、「見える」と表現した場合、その知覚の主体は意図的・能動的に対象物を知覚しているわけではなく、反対に対象物の方が知覚の主体の視野に入ってくると解される。この場合、知覚の主体はむしろ受動的に対象物を知覚しているにすぎない。これとは逆に、「眺める」などと表現した場合、知覚の主体は能動的に、自らの意志でもって対象物を知覚しているのが普通である。ここで、山梨（1995:223）の指摘を引用する。

「認知主体が外部世界（すなわち状況）を認知していく場合、単に問題の対象の刺激を受動的に受け入れるのではなく、外部世界の知覚対象にたいする主体の視線の能動的な投影が重要な役割を担っている。」

これを援用すると、知覚の主体の知覚行為に対する能動性が主観性の程度に関わると言うことができる。すなわち、知覚行為の能動性が高いほど、その知覚による状況描写は相対的に主観性の程度が高く、逆に能動性が低い、あるいは受動的になると、主観性の程度が低くなり、結果、客観性が増すと考えられる。換言するならば、(6)～(9)の描写の方が、(4)～(5)の描写に比して相対的に主観性の程度が高いと言える。以上の考察から、形式上同じ客観的間接状況描写として分類される表現であっても、その中でさらに主観性の程度の差があり、それは当該知覚行為の表現のされ方の違いに反映されるということがわかった。<sup>5)</sup>

## 2.2. 主観的直接状況描写

ここでは、前節とは逆に、表現者の視点と認知主体の視点が一体となる主観的直接状況描写について、分析を行う。

(10) 島村はその方を見て、ひょっと首を縮めた。鏡の奥が真っ白に光っているのは雪である。その雪のなかに女の真赤な頬が浮かんでいる。

(11) 島村は不思議な部屋のありさまを見廻した。低い明かり窓が南に一つあるきりだけれども、棧の目の細かい障子は新しく張り替えられ、それに日射しが明るかった。

(10) (11) の下線部は、それぞれ島村が視覚によって認知している状況の描写であると解釈するのが自然である。これらにおいては、客観的間接状況描写の場合とは異なり、認知主体である島村自身は明示されていない。

すなわち、表現者である語り手の視点が当該状況の内側に入りこみ、島村のそれと一体化するように状況を認知し、描写しているのが、先述の西村の説明にもあるがごとく、認知主体の島村は必然的に明示されなくなるのである。表現者は自らの視点を認知主体である島村のそれと一致させるがごとく、主観的に当該状況に投影し、いわば状況の内側から直接に描写を行うのである。英語同様、日本語の物語文においても、「主観的直接状況描写」の存在が見受けられるわけである。

しかし、先述の客観的間接状況描写の場合と同様、主観的直接状況描写においても、同じ描写形式であるにもかかわらず、主観性の程度が異なる場合があることに注視しなければならない。それは、上例(10) (11)の各状況描写における文末形「ル形」と「夕形」の違いに起因する。両例ともに、認知主体である島村が、それぞれの状況の内側に視点を置いて認知している点は同じである。問題は語り手すなわち表現者の視点である。たしかに、両例ともに、認知主体の島村を明示しない点で、表現者の視点もまた状況の内側に置かれているとは間違いない。だが、ル形を用いた(10)の描写が、まさに島村の眼前で鮮明に状況が展開されているように解釈され得るのに対し、夕形を用いた(11)の描写は島村の眼前の状況に違いはないが、(10)に比して、表現者の視点の置かれる位置が相対的に状況から遠ざかっているように解される。これは、本来日本語の時制を示すマーカーであるはずのル形と夕形の持つ時間的遠近感の概念が、空間的遠近感の概念に拡張された結果であると考えられる。つまり、時間的遠近感の概念でル形と夕形の違いを考えた場合、夕形の方が時間的に距離がある。次例を見てみよう。

(12) ここに、猫が一匹いる。

(13) ここに、猫が一匹いた。

現在という時点を基準点とすると、そこからは(13)の方が(12)よりも明らかに距離がある。この概念を、状況とそこに投影される表現者の視点の距離の係りに拡張解釈するのである。<sup>6)</sup> そうすると、夕形を用いた(11)の方が、ル形を用いた(10)よりも、表現者の視点が当該状況からより遠い位置に置かれていると考えられ、その結果、上述のような違いが生まれてくるわけである。これを認知主体である島村の視点との関連で考えると、ル形を用いた(10)の描写においては、表現者の視点が認知主体の視点と完全一致しているのに対し、夕形を用いた(11)の描写においては両者は完全には一致せず、前者は後者のやや外側にある。もっとも、客観的間接状況描写の場合と違い、表現者の視点が状況の外側に置かれるわけではない。(10) (11)ともに、それが状況の内

側に置かれているという点、すなわち両方とも主観的直接情況描写である点に変わりはないのである。ただ、認知主体が投影した視点との相対的な距離の差の問題である。しかしその距離の差ゆえに、同じ主観的直接情況描写であっても、(11)の方が(10)よりも相対的に客観的であると言えるだろう。客観的間接情況描写の場合と同じく、同じ情況描写の形式をとっていても、主観性の程度には差異が見られることがわかる。

### 2.3. 中間的情況描写

中間的情況描写は、客観的間接情況描写と主観的直接情況描写の中間的性質を持つものであるが、日本語の物語文には、この描写の表現形式が多く見られる。

(14) 嘘のように多い星は、見上げていると、虚しい速さで落ちつつあると思われるほど、あざやかに浮き出していた。

(15) よく見ると、その向うの杉林の前には、数知れぬ蜻蛉の群れが流れていた。

上の2例は、ともに中間的情況描写である。認知主体はやはり島村なのだが、明示されていない。この点は、主観的直接情況描写と同じである。しかし、認知主体の知覚行為、すなわちここでは「見上げる」、「見る」という行為が明示されており、この点は客観的間接情況描写と同じである。そうすると、これらは1.3.で分析した英語の中間的情況描写と全く同じ性質を持っていることがわかる。日本語の物語文における中間的情況描写であるというわけである。

ただし、ここでも客観的間接情況描写の場合と同じく、認知主体の知覚行為の能動性という観点で見ると、その視点の主観性の程度に差異が見られる。以下の諸例を考察してみよう。

(16) しかし目の前の蜻蛉の群は、なにか追いつめられたもののように見える。

(17) 翌る朝目をあく、駒子が机の前にきちんと坐って本を読んでいた。

(18) 尼僧が二人づれ三人づれと前後して橋を渡って行くのが見えた。

(19) 駒子もいるなと思う間もなく駒子ばかりが見えた。

(20) 天の河は二人が走って来たうしろから前へ流れお

りて、駒子の顔は天の河のなかで照らされるように見えた。

これらの例では、(14)(15)の「見る」と違って、「見える」という表現が用いられている。前者の表現の方は能動的であり、後者の表現は相対的に受動的である。また、(17)の場合、「目をあく」すなわち起きるという行為は無意識的であり、駒子が本を読んでいるという情況も能動的に認知されたのではない。むしろ目を開けた結果、駒子のそうした姿が視界に入ってきたと考えるのが自然である。その意味で、これもまた受動的である。そうすると、2.1.の分析から、同じく中間的情況描写であっても、(14)(15)の方が、(16)～(20)に比して相対的に主観的であると言える。

もちろん、この主観性の程度が、連続する同じ描写形式の中で変っていくこともある。以下の例を見てみよう。

(21a)..四方雪の山の狭い土地だなあと眺めていると、  
(21b)駒子の髪の毛の黒過ぎるのが、日陰の山峡の侘しさのために反ってみじめに見えた。

上例では、(21a)から(21b)へ中間的情況描写が連続して展開するが、(21a)に比べて(21b)は主観性の程度が弱まっている。<sup>7)</sup>

### 3. 結語と今後の課題

本稿では、まず第1章で、英語の物語文における知覚による情況描写には「客観的間接情況描写」、「主観的直接情況描写」、「中間的情況描写」という3つの表現形式が存在することを再確認した。そして同時に、視点の概念や、表現者と認知主体の視点の位置関係と、それらの認知されている情況からの距離ともいべきものが、表現形式の主観性の程度の差につながるという事実を論じた。続く第2章では、この枠組を日本語の物語文における知覚による情況描写の表現に適用し、分析を試みた。その結果、日本語でも英語の場合と同様、視点と主観性という認知言語学的観点から、同じく上述の3表現形式に分類され得るということを示した。ただし、そうした分類の中にあっても、客観的間接情況描写および中間的情況描写については、知覚行為の能動性によってさらに主観性の程度が相対的に異なるということを見出した。また、主観的直接情況描写においては、知覚行為の表現形式としてL形が用いられているか、あるいはタ形が用いられているかによって情況からの表現者の視点の遠近感が変わる結果、主観性の程度がここでも相対的に異なることになるということも実証した。特に後者の事実は、

英語には見られず、日本語独自に見られる特徴であると言える。

最後に、今後の課題を挙げておく。まず、2・3でも少し触れたように、物語文中における状況描写にみる主観性の程度がどのように変化していくのかを、単文ではなく、テキスト単位で分析する必要がある。例えば、一連の視覚による状況認知を表現するために、客観的間接状況描写から主観的直接状況描写へ、またその逆へと描写が連続的に展開していくパターンが考えられる。これを実際の物語文で分析することによって、主観性や視点の「流れ」ともいべきものの実態が明らかになるだろう。そしてその上で、本稿冒頭で述べたがごとく、物語文中の知覚による状況描写の表現形式に対する視点の反映度という認知言語学的アプローチによって英語と日本語の対照研究を行うことにより、言語類型論に寄与することができよう。本稿での日本語の分析は、既に完了した英語での分析とあいまって、そのための礎を築いたと言える。

## 註

1) この事実について、代表的な指摘を以下に挙げておく。

Banfield (1982:68) ...any subject confronting a world necessarily adopts a position from which he perceives what will constitute his visual field...and any point of view is thus a limited one...point of view is the term for subjectivity as a feature of narrative style.

山梨 (1995:203, 285) 外部世界が常にありのままの姿、なまのままの姿で記述できるわけではない。そこには、外部世界を解釈していく際の、われわれの主観的な視点やパースペクティブが反映されている...われわれは与えられた状況に対し、何らかの主観的な視点を投影しながら外部世界を理解している。

2) 本稿における「視点」の定義については、澤 (2003) のそれを基盤として以下のごとくとする。「『視点』とは、認知主体および表現者が状況を認知し描写する際、そこに投影する自己の主観的な視覚上の位置である。」

3) このような解釈は、西村 (2000:148) による以下の説明によっても補強される。例えば以下の例において、

- a. I (can) see a bus over there.
- b. 向うにバスが見える。

英語の表現では明示されている知覚の主体（この場合には話し手）が、日本語には現れていないという点、また

表現主体と表現対象を対立する二項と捉えた場合に、あるもの（ここでは a. の I）が表現対象の側に属しているという点において、この場合には日本語の表現の方が主観性が高いとする。逆に言えば、知覚の主体が明示された a. のような英語表現は、相対的に客観性が高いということになる。

4) このことは、以下の西村の指摘からも、当然であるといえる。

「自己の視覚経験を報告する際に、われわれの視野の中心を占めているのは視覚の対象であって、視覚の主体としてのわれわれ自身は通常視野に含まれないのであるから、前者のみが表現の対象になるのは自然であるとすら言える。」(西村(2000:151))

5) 一般的な対応関係では、

日本語「見える」 英語 see

日本語「見る」「眺める」 英語 look at, watch

となる。本論(4)~(9)で挙げてきた例が、英語の翻訳版においてこのような対応関係になるかを調査・吟味することが、英語と日本語の状況描写の表現形式の異同を明らかにするという対照研究として成立し、言語類型論に資することになる。この作業については、稿を改めることにする。

6) 板坂は、この日本語のル形とタ形による時間的遠近感の概念を、「体感的時制」と呼び、以下のように指摘している。

「日本語の場合は..話し手の視点が自由に動くし、時制の統一はむしろ避けられる傾向にある。...一つ一つ対象が変わるたびに、単に空間的な距離感が変わるだけでなく、時間的な距離感も自由に動いている。...作者は時空を超越したがごとく自由自在に視点を動かすわけである。」(板坂(1971:146-147))

以上の点から考えると、ル形とタ形が時間・空間両面において、視点の遠近感を反映していると考えられる。

7) この点については、連続する2以上の状況描写の表現を物語中のテキスト単位で考察する必要がある。客観的間接状況描写・主観的直接状況描写・中間型状況描写がテキスト内で連続的に展開する場合、どのような順序で展開し、相対的に視点がどのように移動して、その結果、主観性の程度がどのように変わっていくのかの検討は、関連したもう一つの問題である。これに関しては、別に考察の機会を設けたい。

## 引用・参考文献

- [1] 板坂 元. 1971. 『日本人の論理構造』 講談社、東京 .
- [2] 川端康成. 1947. 『雪国』 新潮文庫、東京 .
- [3] 久野 肇. 1978. 『談話の文法』 大修館書店、東京 .
- [4] 水谷信子. 1985. 『日英比較 話し言葉の文法』 くろしお出版、東京 .
- [5] 中川ゆきこ. 1983. 『自由間接話法』 京都あぼろん社、京都 .
- [6] 西村義樹. 2000. 「対照研究への認知言語学的アプローチ」 坂原茂 (編) 145-166 .
- [7] 坂原茂 (編) . 2000. 『認知言語学の発展』 ひつじ書房、東京 .
- [8] 澤 泰人. 2003. 「物語文における情況描写と視点との関わり」 『YASEELE No. 7』 山口大学英語教育研究会 .
- [9] 山梨正明. 1995. 『認知文法論』 ひつじ書房、東京 .
- [10] Banfield, A. 1982. *Unspeakable Sentences: Narration and Representation in the Language of Fiction*, Routledge & Kegan Paul, Boston.
- [11] Black, J.B., et al. 1979. "Point of View in Narrative Comprehension, Memory, and Production," *Journal of Verbal Learning and Verbal Behavior* 18, 187-198.
- [12] Bruder, G.A., et al. 1986. "Deictic Centers in Narrative: An Interdisciplinary Cognitive-Science Project," Technical Report at State Univ. of New York at Buffalo.
- [13] Hemingway, Ernest. 1976. *The Old Man and the Sea*, Grafton Books, London.
- [14] Kuno, S. & E.Kaburaki. 1977. "Empathy and Syntax," *Linguistic Inquiry* 8, 627-672.
- [15] Leech, G.N. & M.H.Short. 1981. *Style in Fiction: A Linguistic Introduction to English Fictional Prose*, Longman, New York.
- [16] Morrow, D.G., et al. 1987. "Accessibility and Situational Models in Narrative Comprehension," *Journal of Memory and Language* 26, 165-187.
- [17] Rapaport, W.J., et al. 1989. "Deictic Centers and the Cognitive Structure of Narrative Comprehension," Technical Report at State Univ. of New York at Buffalo.
- [18] Uspensky, B. 1973. *A Poetics of Composition*, University of California Press, Berkeley.
- [19] Wiebe, J.M. 1990. "Recognizing Subjective Sentences: A Computational Investigation of Narrative Text," Technical Report at State Univ. of New York at Buffalo.